馬場　知己先生を憶う

工学院大学　矢部　　眞

工学博士　馬場知己先生（KK都市環境システム研究所代表取締役）の訃が6月18日夕刊で報道された．“17日夜肝不全で死去．70才”びっくりもし，がっかりもした．まだまだ活躍される年令．まことに惜しい方を失ったと残念でならない．

先生とは国鉄（建築卒で都市計画がご専門．機械卒で車両修繕関係の筆者とは勤務系統が異なるから，接触の機会も少なく，上司・部下ではなかった）と，本学会のご縁，接点は交通へのORの応用．にもかかわらず公私共にお世話になった．

先生には昭和55年(以下，年号は昭和)9月，新宿ORクラブ発足当初から代表世話人をお願いした．話もされたほか，律儀によくご出席．昨年5月，クラブの席上で“胆石除去手術のため入院予定．しばらく欠席”といわれた．苦しい病気だが危険はないから，すぐにも退院されよう，と心配はしていなかった．しかし，昨年9月のクラブは欠席．そのときの講演はかねて意気投合されていた丹沢章浩氏（三井不動産，ホテル・サンルート，船橋ららぽーと等の役員）による東京ディズニー・ランドでの苦労と成功のお話．面白く，また好評であった．この講演依頼は先生にお話したし，興味ももたれていたのに欠席されたのは意外．あとでうかがえば入院中であったとのこと．11月になってようやく出席された．“来年3月に51年から10年間勤めた中部大学教授を定年退職する．4月からは夜の会合も出席可能”と大分元気を恢復された様子だったが，これがお目にかかった最後とは—．

丹沢氏の話をききのがされたこと，先生は大変残念がっておられた所，「交通問題部会」のメンバーにも希望が多く，ここで再演を願うことになった．しかし丹沢氏がご多忙で順延，ようやく6月18日を希望し確認がとれたのが15日．16日に先生の会社へ電話，“退職挨拶で過労，入院中”とのこと．せめてメモでもとってと思い作成．間に合わなかった．嗚呼

先生は抜群のアイデア・マン．幅広い読書がそのもとだろうか？　きめ細い観察（国鉄運賃の値上げとマンション分譲価格の関係を新聞広告で調査），本質を見抜く洞察力（“通勤新幹線による30万都市造成”案には即座に“絵空事”と．——後日，戸隠行の途中に長野市を展望できたがその人口約25万と聞き合点）．幅広い人脈（13年京大建築科卒後鉄道省へ．短期現役の主計将校．旧満洲でコンクリート船建造研究に従事，戦後2年間シベリア抑留のあと復員）には常に敬服させられた．加えて果敢な実行力である．建築系で初めてでただ1つの工事局創設．その第2代局長——東京建築工事局——を勤められ41年退職．その後4年間新東京国際空港公団参与として成田空港建設に従事され退職．45年に現在の会社を創設された．若輩のわれわれからすると，正にスーパー・マンと思ったことも度々あった．

32年国鉄川崎火力発電所建設工事を指揮され耐震構造を採用．同年日本建築学会賞を受賞．またこの研究で36年東大より学位授与された．しかし，何といっても最大の功績は，28階の超高層による東京駅改築計画の推進であろう．諸般の事情でこの計画は陽の目を見なかったが，この研究成果がもとになって三井不動産による霞ケ関ビルが誕生．超高層時代の幕を開かれたわけである．

51年秋季大会（名古屋）——特別テーマ「交通」——で「ORと都市計画」の特別講演をされ，故北川一栄会長はじめ列席者一同に深い感銘を与えられたローマ時代にかかれた有名な建築書「Vitruvius の Architectura」から始められ，G. B. Dantzig等の「コンパクト・シティ」まで，「田園都市」コルビジェの「家は住む機械」等にまで言及された．特に強調されたのは今日の米国都市の一部荒廃を予言，警告した J. Jacobs 女史の本のこと：「ゾーニングによる都市計画は誤りであった．都市は凝集形態居住住宅であるべきだ．」この点の実現にはORワーカーの奮起を望むと述べられた．

52年本学会に入会され，丸の内ORクラブ参加．52～54年「都市とOR，研究部会主査（幹事は西木俊彦氏）“都市計画とは所詮交通問題”と喝破されていた．

思えば筆者が初めて拝眉したのは東京駅改築計画は技師長室(現技術計画室)の時代でであった．開口一番“官僚の縄張り根性は…”これを国鉄でいわれるのだから度肝を抜かれた．十河総裁(御父上粂夫氏——日立の功労者——と同郷）の就任挨拶で《大いに他人の畠に口を出せ》といわれたとも語られた．こんな具合だから先生の論には風当りが強かった．しかし，70年の生涯を男らしく生き抜かれたことを敬服する人びとも少なくない．今春の生存者叙勲で勲3等瑞宝章を受けられた．ご冥福を祈って止まない．合掌

© 日本オペレーションズ・リサーチ学会．無断複写・複製・転載を禁ず．